

吉田宗恂とその周辺—コンピュータと図書館を活用して

(2) 中巖円月・月舟寿桂・継天寿戩・梅屋宗香

島野達雄

1. 前回までのキーワード

国書総目録／『本草序例』／吉田宗恂『本草序例抄』／阪大図書館・大日本史料／月舟寿桂 (1470-1533)・継天寿戩 (1495-1549)・梅屋宗香 (?-1545)／中巖円月 (1300-1375)

2. 中巖円月の著作

中巖円月が 12 歳で「九章算法」を習ったという「自歴譜」は、『五山文学全集』の東海一漚集にある。『五山文学全集』には、中正子外篇 3・方円篇や中正子外篇 6・治暦篇、文明軒雑談の一部がふくまれている。文明軒雑談の全部は『五山文学新集』第 4 巻にあり、玉村竹二による「中巖円月集解題」は、やたら詳しい。川本慎自「禅僧の数学知識と経済活動」が引用する文明軒雑談の、唐代の度量衡記事の出典は、政書の『通典』第 6 巻であることは Wikisource (維基文庫) ですぐにわかる。なお、維基文庫は旧字体で検索する必要がある。

3. 月舟 (幻雲) 寿桂

月舟寿桂は、建仁寺では中巖円月の塔所・妙喜庵に居住した。伝記は玉村竹二『五山禅僧伝記集成』に詳しい。

続群書類従第 13 輯上 (巻 342) の幻雲文集のうち、「修月記」の冒頭部分には、「月之在天地 (空同集 59, 明文海 85 他), 旋而左 (楽書 82, 貴州通志 2 他), 々而右轉 (なし), 未嘗離, 四萬二千 (妙法蓮華經 24 ほか) 山句須彌半腹也」(カッコ内は出典) とある。「三祝説」には「則百千萬億兆京稀垓」とあり、「神農像」には「上藥應天者一百二十種, 中藥應人者一百二十種, 下藥應地者一百二十五種」と『本草序例』の『神農本經』の引用があり、「贊雪岑老人所藏神農像」の冒頭には、「醫者意也」とある。この文言は『本草序例』、『歴代名医伝略』宗恂自序などに見える。維基文庫で検索すると、146 件が表示される。

幻雲文集はまた、源為朝渡琉説で知られる (小番達「源為朝渡琉伝承の始発—『保元物語』から『幻雲文集』へ—」, 林雅彦編『絵解きと伝承そして文学』所収)。漢文学からの研究には、朝倉尚『抄物の世界と禅林の文学』に「月舟寿桂小論」がある。

医学では、わが国の医書出版の嚆矢となった熊宗立 (熊均)『医書大全』の跋文を書き、史記の扁鵲倉公列伝に注釈を加えた『史記抄』を撰述した (写本が足利学校に残存)。相

国寺の桃源瑞仙の史記抄（京大電子図書館）は、月舟の史記抄とは異なる。

なお、小曾戸洋ほかの「月舟寿桂（幻雲）の医界における交友関係」は、国会図書館の論文送信サービスで読むことができる。このサービスは、中之島図書館でも利用できる。

4. 継天寿戩と梅屋宗香

月舟の法嗣・継天寿戩の伝記は、上村観光『五山詩僧伝』にある。玉村竹二『五山禅僧伝記集成』に継天寿戩の名前は登場するが、伝記はない。

梅屋宗香は月舟の門生。梅屋文集は続群書類従第13輯下。「策彦入唐之送行」「策彦再渡唐之時和」など漢詩中心。策彦の二回の渡唐には、宗恂の父・宗桂が二回とも同行した。

5. 僧侶の医学・暦学知識と足利学校

室町時代から安土桃山時代の僧侶は、中巖円月や月舟寿桂にみられるように、漢学の素養をつちかい、相当の医学・暦学の知識を持っていたと推定できる。先行研究として、川瀬一馬の『五山版の研究』『足利学校の研究』、服部敏郎『室町安土桃山時代医学史の研究』（日記文学に見える医学，キリシタン医学に詳しい），新村拓『日本医療社会史の研究』（古代中世の医療に詳しい），以上三人の著作をあげることができる。

宣教師の報告によれば、足利学校は当時、日本最大の学校で、漢学・儒学のほか医学、占星術（易学）を教授した。とくに第九世座主・三要は、家康に陪侍して伏見版を開版し、曲直瀬道三、藤原惺窩などと広く交友した。道三とその師・田代三喜も足利学校に学んでいる。

なお、天文2年（1533）12月8日に亡くなった月舟寿桂の記事を、関学図書館のレファレンス係に探してもらったが、後奈良天皇時代の大日本史料は存在しないことがわかった。

6. 『本草序例』の受容

新村拓『日本医療社会史の研究』は、薬品の輸入に関して大日本史料12編1補遺の「角倉文書」を引用し、宗恂の経歴に関して10編12の「吉田文書」と寛政重修諸家譜を引用しているが、12編7にある17歳の宗恂作の本草序例抄（寛永18年西田勝兵衛版）跋文を指摘していない。

服部敏郎『室町安土桃山時代医学史の研究』も、宗恂については寛政重修諸家譜とほぼ同じ内容で、先に述べた月舟寿桂の史記抄を詳しく紹介しているが、宗恂と月舟寿桂・継天寿戩・梅屋宗香との関係については述べていない。

目下のところ、宗恂につながる『本草序例』のわが国における受容の歩みは、大日本史料12編7の本草序例抄の跋以外に史料が見当たらない。歴代名医伝略・無刊記本（杏雨書屋蔵）に見える地球（地円）説（「吉田光由と今村知商の『或師』について」2017年3月）のように、同じ本でも諸版をくまなく読んでいけば、見つかる可能性がある。

7. 町田恵一著『江戸前期上方色摺史の研究』

先日、東京の町田恵一氏（昭和 2 年生まれ）から労作をいただいた。二色刷り塵劫記を詳しく研究され、中国伝統の多色木版印刷「套版」「飴版」についても触れられている。

じつは『本草序例』にも、二色刷りについての記述がある。

重修政和經史證類備用本草の嘉祐補注總叙に、宋・掌禹錫が

所謂神農本經者，以朱字，名醫因神農舊條，而有增補者，以墨字，間於朱字餘所增者，皆別立條，並以墨字

と述べているほか、開寶重定序も同様に「神農本經は朱色，その増補などは墨で印刷」と述べている。

寛永諸家系図伝および寛政重修諸家譜は、「(宗恂は家康の求めに応じて) 父・宗桂が明より持ち帰った光明朱（上質の朱）を家康に献上した」と記している。

宗恂が本草序例抄を著した当時、実際に朱墨二色が判別できる漢籍があったかどうかは定かではないが、宗恂の『本草序例』の知識と光明朱の献上の経験が、吉田光由の塵劫記の二色刷りに影響を与えたのかもしれない。

8. 今後の見通し

足利学校で教授された漢学，医学，天文暦法，易占い，算数・数学については，今後，研究の余地が大いにあると思う。吉田宗恂を中心として，兄の角倉了以，その子・素庵，父の吉田宗桂，吉田光由，足利学校席主・三要，藤原惺窩，林羅山，姜沆，策彦周良，曲直瀬道三一溪，その弟子・玄朔，田代三喜，中巖円月，月舟寿桂，継天寿戩，梅屋宗香，そしてジョアン・ロドリゲス，カルロ・スピノラなどのイエズス会宣教師，といまや役者は出そろった感がある。

コンピュータと図書館の活用法 (3)

1. 足利学校と小学集解

川瀬一馬『増補新訂足利学校の研究』口絵 56 頁にある『元版小学集解』は、国会図書館蔵となっているので、国会図書館デジタルコレクションで「小学」で検索し、「古典籍資料 (貴重書)」で絞り込むと、隆慶 3 年(1569)朝鮮銅活字本の『諸儒標題注疏小学集成』、『琉球八重山列島見聞録』(これが小学とどういう関係にあるのかわからない)、明・程愈の『小学集説』、清・高愈の『小学纂注』、類書の『玉海 204 卷』などが表示される。

現在、国会図書館でデジタル公開されている『小学集解』は清・張伯行(康熙の進士)纂輯、上海商務印書館 1936 出版のもの。足利学校で用いられた元版ではない。清代の小学集解はいくつかの大学が所蔵しているが、関学図書館は所蔵していない。

CiNii Articles で最所顕文「小学集解の国訳(立教篇)」(日本倫理学会)という論文を見つけ、関学図書館で複写依頼をしたら、一週間もしないうちに、岐阜市立女子短期大学からコピーが届いた。240 円也。この論文、「九数」について、ほとんど解説していない。

2. 諸儒標題注疏小学集成

国会図書館の『諸儒標題注疏小学集成』は、何やら怪しげな(?)「九数の図」が図篇にあるほか、朝鮮銅活字本であり、徳川家康旧蔵となっているので、大いに興味がわく。よって全冊ダウンロードした。

国会図書館の古典籍のダウンロードは、所定の画像にたどりついたら、「印刷」のボタンをクリックし、pdf化する。一度に 50 ページしか pdf 化できない。小学集成は全部で 6 冊 417 ページある。50 ページずつダウンロードしたあと、1つの pdf ファイルにまとめたり、トリミングするには、アドビー社のアクロバットが必要。なお、無料のアクロバット・リーダーは読む(表示する)だけに使える。

この朝鮮銅活字本・小学集成 pdf は 27-28p が九数の図。72p に有名な七年男女不同席があり、86-88p が周礼の六芸について、95p から一日方田以下の朱子の本注や程氏、熊氏の注釈が載っている。

国会図書館の「詳細書誌情報」にある解題は次の通り。

「小学」は南宋の朱熹の門人劉子澄の著。修身、日常道徳について述べる初学者のための書。本書は「小学」に対する宋・元諸儒の説を集録したもので、朝鮮朝世宗の勅命を奉じて儒者金汝が校讐、世宗 18 年(1436、正統元)に初鑄甲寅字を用いた初版が出された。甲寅字は 1434 年甲寅の年鑄造の銅活字。鮮明さと均整のとれた美しさで知られ、王朝末期まで幾度も改鑄使用された。本版は、宣祖 2 年(1569、隆慶 3)頃の改鑄甲寅字を使用し、漢陽(現、ソウル)校書館において印行されたもので、補字を多く混える。各冊に国王の方形朱印「宣賜/之記」があり、第 1 冊見返しに官版出版の際、百官に下賜された書物であることを示す隆慶 3 年の内賜記がある。徳川家康、徳川義直、細野要斎旧蔵書。

この解題から、当時の高麗が国をあげて刊行したことがわかる。百官に下賜された、とあるが、九数を理解していた官吏がいたのか、かなり疑問である。徳川家康はこの九数の図を見たのだろうか。

コンピュータと図書館の活用法 (4)

吉田宗恂の『歴代名医伝略』の翻刻（漢字 4 万 5 千字×4 種&読み下し文 15 万 5 千字）および解明には約 5 年の歳月が必要だった。『本草序例抄』7 巻は約半年（2017 年 3 月～8 月）で約 25 万字の入力をほぼ終えたが、内容の解明には、あと数年はかかるだろう。

1. 翻刻の難しさ

今回の本草序例抄の入力は、ネットで容易に入手できる国会図書館・白井光太郎旧蔵本（pdf で 514 頁）を底本とした。原文はゴ式カタカナ漢字まじり文が中心で、訓点つき漢文もかなりある。「読みやすく」をモットーとして、漢字は通用字（ユニコードの包摂字体^{●1}）を使用、レ点、一二点などの返り点はクリップボードにあらかじめ用意しておき、必要な箇所には貼り付けた。

入力スピードと読みやすさの上から、カタカナはひらがなで入力した。ワードでは一瞬にして全部カタカナに変更できる。

難漢字の入力は 10 年ほど前に買った「文字鏡」を利用したが、歴代名医伝略のときと同様、5 万字に 1 字程度は文字鏡にも無い漢字があらわれた。

字義字韻については韻会（『古今韻会挙要』）からの引用が 95 か所以上ある（単に「会」とする箇所も多い）。関学図書館で「韻会」「韻會」で検索すると「該当書なし」となり、「古今韻會舉要」または「古今韻會挙要」で検索すると表示される。この古今韻会挙要は平上去入の四声で分類されており、非常に調べにくい。

中身は、正直なところ、わからないことだらけ。歴代名医伝略の経験から、100 の疑問点があれば、半分の 50 はインターネットで見当がつく。残りのうち 25、つまり 4 分の 1 はツテを頼ってその道の達人に教えてもらえる。残りの 25 は、自分で調べるしかない。

以下、入力中に見つけた事柄をとりあえず速報する。

2. 月舟・継天からの引用

さきに、大日本史料 12-7 に宗恂 17 歳の折の本草序例抄・自跋が載っていることを紹介した。この跋文中に登場する、東山月舟和尚つまり月舟寿桂（1470-1533）と、裔継天つまり継天寿裔（1495-1549）の二人の文言が実際に本草序例抄の本文に引用されている。

月舟からの引用は、①巻 3（pdf29）羽毛「月舟の義に」、②巻 3（pdf30）子母「月舟云」、③巻 4（pdf10）壺「月舟の云」、④巻 4（pdf12）戴面「月舟云」の 4 か所。旧蔵者の白井博士の（ものと思われる）人名をあらわす朱引きは②③についており、①④には無い。

継天からの引用は⑤巻 4（pdf36）銭五七「継天の義に」、⑥巻 5（pdf38）雷公炮灸論序「継天の抄に云」、⑦巻 6（pdf21）仍「継天の曰」の 3 か所。朱引きは⑤⑥⑦ともに無い。

●1 ユニコードは無神経にも草と草を区別しない。国語に無知無能な人が定めた。

3. 一栢について

月舟の引用①と対比して⑧巻3 (pdf29) 羽毛に「一栢の義に」、月舟の引用②に対比して⑨巻3 (pdf30) 子母に「一栢の説に」とある。加えて⑩巻7 (pdf4) 夫遊魂に「一栢翁の曰」…「以上の義、一栢之所説也」と一栢なる人物の引用がある。⑨のみ朱引きあり。

月舟と一栢（姓は谷野）との交友は、幻雲文集（続群書類従第13輯上）の終りのほうに月舟が一栢に贈った漢詩があることからわかる。

『国書総目録』で調べると、一栢講・月舟聞書・清原宣賢筆の『易学啓蒙通釈口義』を京大が所蔵（重要文化財）し、デジタル画像を公開している。

国立情報学研究所の CiNii Articles [日本の論文をさがす] で「一栢」をキーワードにして検索し、平泉洸「越前国一乗ヶ谷版の医書と一栢老人」藝林 11(2)1980-04 が関学文学部史学科に、鈴木博「医学の抄物二三 一栢・道器・玄朔」国語国文 45(6)1976-06 が関学図書館に、宮川浩也「谷野一栢著『難経抄』所引医書について」日本医史学雑誌 42(2)1996-05 が関学図書館に所蔵されており、すべてコピーをとった。

また、平泉洸「天之図と一栢老人」芸林 42(1)1993-02 は立命館大学に、小曾戸洋・真柳誠「一栢自筆の『難経抄』漢方の臨床 42(8)1995-08 および小曾戸洋・真柳誠「一栢の研究した熊宗立本『内経』古鈔本」漢方の臨床 42(9)1995-09 は福岡大学に、それぞれ関学図書館から複写依頼をしてもらった。福岡大学からは親切なことに「白黒で依頼を受けたがカラーでない」と読みにくい」と連絡があった。A4用紙4枚、カラー複写で郵送料をふくめて440円也。

平泉洸「天之図と一栢老人」を読むと、佐々木英治という人が『滝谷寺蔵「天之図」の研究 その分析および時代考証と谷野一栢について』という32頁の小冊子を1989年に自費出版していることがわかった。あいにくこの本は、福井県立図書館しか所蔵していなかったが、佐々木英治氏と旧知の和算ゼミの小寺裕氏から pdf を送ってもらった。滝谷寺にある星図および隋・丹元子の歩天歌が載っている「天之図」は重要文化財に指定されており、文化庁のホームページで概要をうかがえる。

4. 今後の見通し

現在、宗恂の『医方大成論抄』の入力を進めているが、頭書に「東井翁（二代目曲直瀬道三玄朔のこと）曰」や「栢（一栢のこと）云」といった記述が散見される。宗恂につながる室町・安土桃山時代の医学の系譜は、まだまだ調べる必要があるだろう。

本草序例抄には「算」が8回登場し、「算用合う也」といった記述もある。

本草序例抄がこれまでほとんど研究対象にならなかった理由は、和漢の、歴史・国語・文学・医学・薬学・易学・暦学・数学といった広い範囲の知識が必要だったからに違いない。いま、ようやく本草序例抄と吉田宗恂の研究を総合的に進める時期が来たように思う。

[PS] 鈴木武雄氏から論文『『割算書』と隠れキリシタン』をいただいた。佐藤賢一氏が仙台藩のキリシタンの家に割算書の写本が伝来したことを「大発見」した、と報じています。